

教科	芸術	科目名	音楽Ⅰ	単位数	2	開講対象 年次コース	2年次 必修
使用教科書		音楽Ⅰ MOUSA 1(教育芸術社)					
副教材等		改訂 音楽通論(教育芸術社)					
備考(履修条件等)							

1 科目の学習到達目標

音楽に関する興味・関心を高め、芸術を愛好する心情を育てるとともに、音楽の幅広い活動を通して、意欲的に表現を工夫する能力や、即興表現による自己表現能力を養う。

2 学習の評価(評価の観点及び評価方法)

(1) 評価の観点

観 点	趣 旨
①知識・技能	自己のイメージを表現するための技能を身につけ、それを生かして創造的な表現をするとともに、世界の多様な音楽に対する知識・理解を深め、すること。
②思考・判断・表現	感受を働かせて、音楽の諸要素を知覚し、音楽のよさや美しさを感じ取って創造的な音楽活動を工夫すること。
③主体的に学習に取り組む態度	音楽を愛好し、音や音楽に対する興味・関心をもち、意欲的に音楽活動をしようとする。

(2) 評価の方法(以下観点①～③は「(1)評価の観点」と対応する。)

観点	学習到達度の確認方法	具体的取組および重要度				
		授業	課題提出	グループ 学習	ワークシート	節末 テスト
①知識・技能	課題、ワークシート、節末テスト	◎	◎		◎	○
②思考・判断・表現	課題、ワークシート等の提出物 (ICT機器による課題含む)	◎	○		○	
③主体的に学習に取り組む態度	授業への積極的な取り組み、課題、ワークシートへの取り組み具合等を総合的に判断。	◎	○	○	◎	

以上を総合的に判断して決定します。(◎はより重視される観点)

3 担当者から

実技や鑑賞など内容は多岐に渡るが、積極的に授業に参加すること。創作にも取り組むので、楽典の基礎の定着、簡単な楽譜やコードが理解できることを目標とする。

歌唱や器楽表現などにも苦手意識を持たずに積極的に授業に参加し、授業内で疑問を解決できるよう集中して取り組むこと。また、ペーパーテストの前には配布されたプリントや授業内容等を振り返り、わからないところをなくしておくこと。

4 年間指導計画

月	単元	授業 時数	項目・学習内容
4	オリエンテーション	2	
	アンサンブルを楽しもう（１）	6	ハンドクラップによるアンサンブルで、奏法の特徴を生かし、曲想にあった音楽表現を工夫し、イメージをもって演奏する。
5	西洋音楽の歴史とその発展 ～オーケストラの楽器を知ろう～	10	オーケストラの各音色の特徴と表現とのかかわりを感じ取り、楽曲や演奏を解釈して、それらの価値について理解する。
6			
7	歌曲の世界～独唱を楽しもう～	6	歌曲がもつ曲想を歌詞の内容や楽曲の背景などとかかわらせて、イメージをもって歌い、表現を工夫する。
8	合唱の響きを感じ取ろう	6	合唱活動に関心をもち、歌詞の内容や曲想を生かして、声部の役割を理解し、全体の響きに調和させて、表現を工夫して主体的な合唱活動をする。
9	楽譜や理論を知ろう（１）	4	音名や音符の読み方などを理解し、音楽を多方面から理解する。
	創作に挑戦しよう	4	音の特徴を生かし、音楽を形づくっている要素の働きや構成を工夫して、自己のイメージにあった音楽をつくる。
10	舞台芸術の世界	4	オペラ・ミュージカル等の舞台芸術の特徴を理解し、それらの文化的・歴史的背景に関心をもって、そのよさや価値について考え味わう。
	楽譜や理論を知ろう（２）	6	音程や音高、コードネームのしくみなどを理解し、音楽を多方面から理解する。
11	和楽器を演奏しよう（箏）	6	箏の音色や奏法の特徴を生かして、音楽表現を工夫する。またその音楽表現に必要な技能を身に付ける。
12	アンサンブルを楽しもう（２）	14	音程や音高、音名や音符の読み方、コードネームなどを理解して、音楽を形づくっている要素の働きや構成を工夫し、自己のイメージにあったアンサンブルをつくる。
1			
2			
3	音楽にできること	2	アメリカにあるオーケストラが、国交のない国で演奏したドキュメンタリー。音楽（芸術）を通じた文化交流の重要性を考える。
備考			

教 科	芸術	科目名	書道 I	単位数	2	開講対象 年次コース	2年次必履修
使用教科書		書道 I (東京書籍)					
副教材等							
備考(履修条件等)							

1 科目の学習到達目標

書道の幅広い活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、書写能力の向上を図り、表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばし、書の伝統と文化についての理解を深める。

2 学習の評価(評価の観点及び評価方法)

(1) 評価の観点

観 点	趣 旨
①知識・技能	書の表現の方法や形式、書表現の多様性について幅広く理解している。書写能力を向上させるとともに、書の伝統に基づき、作品を効果的に表現するために基礎的な技能を身に付け、表している。
②思考・判断・表現	書のよさや美しさを感じ、意図に基づいて構想し表現を工夫したり、作品や書の伝統と文化の意味や価値を考え、書の美を味わい捉えたりしている。
③主体的に学習に取り組む態度	主体的に書の表現及び鑑賞の幅広い活動に取り組もうとしている。

(2) 評価の方法(以下観点①～③は「(1)評価の観点」と対応する。)

観点	学習到達度の確認方法	具体的取組および重要度				
		授業	課題提出	ペア・グループワーク	ワークシート	振り返りシート
①知識・技能	授業課題、ワークシート	◎	◎		○	○
②思考・判断・表現	授業課題、ワークシート、グループ学習	◎	◎	○	○	○
③主体的に学習に取り組む態度	授業への積極的な取り組み、課題、ワークシート、グループワーク学習への取り組み具合	◎	◎	○	○	○

以上を総合的に判断して決定します。(◎はより重視される観点)

3 担当者から

基本的に予習・復習の必要はありませんが、毎時間課題やワークシートの提出があり、授業に集中して取り組むことが重要になります。授業の中でたくさん練習し、作品を仕上げるという流れを継続することで書は上手くなります。

教材費(大筆・墨汁・半紙・篆刻教材等)がかかります。また、硯・文鎮が必要です。中学校で使っていたものを持参してください。

4 年間指導計画

月	単元	授業 時数	項目・学習内容
4	オリエンテーション	1	
	書写から書道へ	5	書写の確認、用具・用材、姿勢執筆法
			永字八法
5	楷書の成立と変遷	2	五つの書体、成立過程、歴史的背景、字形や線質・点画の特徴
	楷書の特徴・表現の比較	2	それぞれの書風の比較
	・九成宮醴泉銘	4	臨書と鑑賞
6	・孔子廟堂碑	4	臨書と鑑賞
7	・雁塔聖教序	4	臨書と鑑賞
	・自書告身	4	臨書と鑑賞
8	・牛橛造像記	2	臨書と鑑賞
9	・鄭義下碑	2	臨書と鑑賞
	行書の特徴・表現の比較	2	それぞれの書風の比較
	・蘭亭序	4	臨書と鑑賞
10	・風信帖	4	臨書と鑑賞
	・篆刻	6	氏名印作成と鑑賞
11	・草書・真草千字文	2	臨書と鑑賞
	・隸書の特徴・曹全碑	2	臨書と鑑賞
	仮名の成立・仮名の書き方	1	仮名の成立過程、歴史的背景
	仮名の基本線	1	仮名の基本線練習
12	平仮名・変体仮名	2	平仮名单体臨書と変体仮名单体臨書
	連綿練習	2	連綿、連綿線練習
	・蓬萊切	2	臨書と鑑賞
1	漢字仮名交じりの書（表現）	2	表現の工夫
	漢字仮名交じりの書（構成）	2	紙面構成の工夫
2	漢字仮名交じりの書（創作）	6	色紙に自分の好きな言葉を書く
3	漢字仮名交じりの書（鑑賞）	1	色紙創作の鑑賞
	生活の書	1	生活に書を広げる
70			
備考			

教科	音楽	科目名	音楽表現	単位数	2	開講対象 年次コース	3年次文系 選択
使用教科書		なし(プリント等を使用)					
副教材等		増補改訂版 音楽史を学ぶ 古代ギリシアから現代まで 改訂 音楽通論(教育芸術社)					
備考(履修条件等)							

1 科目の学習到達目標

音楽に関する興味・関心を高め、芸術を愛好する心情を育てるとともに、音楽の幅広い活動を通して、意欲的に表現を工夫する能力や、即興表現による自己表現能力を養う。

2 学習の評価(評価の観点及び評価方法)

(1) 評価の観点

観 点	趣 旨
①知識・技能	音楽表現に必要な知識・技能の基本について理解している。
②思考・判断・表現	音楽表現に必要な知識・技能を思考・応用して、適切な判断で演奏や学習に活かしている。
③主体的に学習に取り組む態度	音楽的なアプローチが表現の幅を拡大し、より豊かな音楽につながるよう積極性・主体性をもって授業活動に臨んでいる。

(2) 評価の方法(以下観点①～③は「(1)評価の観点」と対応する。)

観点	学習到達度の確認方法	具体的取組および重要度				
		授業	課題提出	グループ 学習	ワークシート	節末 テスト
①知識・技能	課題, ワークシート, 節末テスト	◎	○		◎	○
②思考・判断・表現	課題, ワークシート等の提出物 (ICT機器による課題含む)	◎	○		○	
③主体的に学習に取り組む態度	授業への積極的な取り組み、課題、グループ学習、ワークシートへの取り組み具合を総合的に判断	◎	○	○	◎	

以上を総合的に判断して決定します。(◎はより重視される観点)

3 担当者から

実技や鑑賞など内容は多岐に渡るが、積極的に授業に参加すること。楽典基礎や簡単な楽譜、コードが既習されていることが前提。
音楽表現に必要な要素は多岐にわたり、楽曲分析などより専門的な内容に臨むため、苦手意識を持たずに積極的に授業に参加し、授業内で疑問を解決できるよう集中して取り組むこと。また、プリントや授業内容等を振り返り、わからないところも復習し習得することが望ましい。

4 年間指導計画

月	単元	授業 時数	項目・学習内容
4	オリエンテーション	1	
	音楽における「表現」の重要性 （導入）	4	音楽的なアプローチ、表現がもたらす有用性について、コンピュータ、学習者、演奏家の各演奏表現を比較しながら、その重要性について考える。
	音楽表現の歴史 （音楽史・演奏史）	11	楽器の進化と声楽表現の器楽における応用（ヴィブラート）など、これまでの演奏史から「表現」について学ぶ。
5			
6	楽典基礎（復習）	8	音楽表現に必要な、楽典理論の復習とその応用方法について学ぶとともに、カデンツなど機能と和声との関わりを学ぶ。
7	ソルフェージュ：基礎と応用	10	表現に必要な技能の基本となる、ソルフェージュ（歌唱・聴音）の基礎について学ぶ。聴音の基礎、単旋律・四声体の聴音、また音符グルーピングの実践方法など、実際の楽器を用いて「表現」について学ぶ。
8			
9	鑑賞研究	10	過去の名演奏家による演奏史を録音や映像資料から振り返り、演奏表現の多様性について学習するとともに、音楽表現の変遷を学ぶ。
10			
11	楽曲研究（アナリーゼ）	8	古典派・ロマン派の楽曲を使用し、機能と和声に即した楽曲の分析（アナリーゼ）を行う。
12	音楽における「表現」とは （まとめ）	8	これまでの学習を振り返り、音楽における「表現」について、研究成果をプレゼンテーション（発表）し、まとめを行う。
1			
		60	
備考			